

不平等な結末

岡本 悠

孝典の精神は、限界を超えていた！

千葉で、疲れ切ってしまった、孝典は、異常な状態にあった

冬、

母親が迎えにきた

タクシーに乗り込む際は、激しく傘の雪を弾いた

タクシーの後部座席では、異様な感じで、手の骨をポキポキとならした

それを、運転手も母も、気にしていた

実家につくと、家族にからんだ

しまいには、大声を出したが

幻聴でヤバイ状態にあった

俺は、パンツ一丁で、こたつの中で寝ていた

朝、起きたら、警察官が来ていた

しばらくして、俺は、警察官の1人に悪態をついた

それをきっかけに、逮捕されて、警察署に連れていかれた

俺は、檻の中にいた

2人の鑑定士らしい、男性が2人現れて、話しかけてきた

俺は、丁重にお辞儀をしたりしていた

何かがわかったようだ

俺は、また、精神病院に連れていかれた、これで3回目だ

手足は縛られていたが、1発目から意外と、開放病棟だった

昔のように、ぐずつ たりは、しなかった

学んでいた

ただ、俺はイライラしていた

担当の男の看護師に「～しろよ！」など、命令したりした

病院内を歩いていたら、歩いている男と目が合ったので、睨み合いになった、異変に気づいた、看護師たちが来て、2人を分けた、その男は「あの人が睨んできたんです」と、弱弱しく言っていた

俺は、その男と、同じ部屋だったから、1度、2人部屋に行くように言われた、俺は「どっちでもいいです」と言うと、その部屋に行くことになった

パソコンを持ち込んで、エロDVDを見ていた、しかし、看護師が監視に来るので、来た瞬間は、画像を閉じた、

マスターベーションは、トイレの個室でした、1回中年の女看護師が窓越しに覗いてきたが、バレナイようにヤッタ

朝起きは苦手だった、男の看護師に注意されるようになってしまった

しばらくして、また、6人部屋に戻った

女医の先生が担当だったが、「孝典さん、あなたは、統合失調症という病気です」と言われた、続けて「一生、治らない病気です」とも言われた気がした、

診察のあと、俺は、泣きそうになったが、なぜか、もうしょうがない、という気になって、気持ちを入れ替えた、その時は努めて明るく振る舞った

こんなの、俺だけじゃないよ、と...

俺は、2つ目の病院の時、迷ったら、親に電話をしたい時はしたほうがいい、と駿河さんに聞いていた、だから、あまり我慢はせず、緑の電話ボックスで、テレホンカードで電話することはあった

俺は、集団で食事をする時、どこに座ろうか迷ったので、女3人が座っている席で食べようとしたが、1人の女が、「入ってこないで！」と言うので、仕方なく、部屋で食べた

翌日、その女性と1対1で朝、会った時、俺は怒りで威嚇すると、その女は去っていった

その後は、飯は1人で食うようにした

女医の先生に歯向かった態度をとった時は、「あなたに、そんなことは言われたくない」という言い方をされた

ある日、朝、いつもは部屋にいるのだが、なんとなくホールのほうへ出たら、朝から野球の試合がテレビでやっていた、皆も騒いでいる、それは、第1回WBCの、ボブ・デービッドソン審判の世紀の大誤審のシーンだった、王貞治監督が抗議をしていた

女の子が、皆の為に、ケーキやドーナッツを買ってきた、ある人が、孝典さんも食べなよというので、呑気に食べたら、その女の子が部屋から出てこなくなった、その女の子には、俺が食べる権利はない、と思ったのだと思う、あとで、反省したというか、気になった

俺が、トチ狂った時、看護師室の数名の女性を集めた、そして、1人の女性を指指すと、他の女看護師は、冷めたように去っていった、指指された女看護師は、最初は動揺したが、やはり、他の看護師たちの気配を感じて、俺を捨てて、去っていった

俺は、廊下で、1人で、プロレスの練習をしていた、ウエスタンラリアットや、ロシアン・フックとか、壁を使って、受け身の練習をした、ちょっと異様だったかもしれない

父や、母も、週1で、それほど長い時間ではないが、お見舞いに来てくれた

直子と知り合いになった

直子は最初、俺のことを「イチ君」、「イチ君でしょ」と言っていた

直子と隣の席で、テレビを見てる時に、イスを近づけて、少し寄り添おうとした、その様子を男の看護師が見て見ないフリをして、「あれは、マズい」という反応をしていたが、俺がイチイチ言ってくるので、何も言ってこなかった

直子は、女性は、男性の部屋に入ってはいけなかったが、突然、遊びにやってきた、そして、ちょっとベッドの中で遊んでいたら、女看護師の声がした、俺は、直子に隠れろと言い、布団の中で隠れさせた、俺はカーテンの外に立ち知らないフリをしたが、バレバレだった、その看護師は「直子さん！」と言うと、2人は看護師の部屋に連れていかれた、俺は、「何がいけないんだ、その根拠は、道理は、定義はなんだ！」とまくしたてたから、その女看護師は、孝典さんはもういいです、と、部屋に戻された、直子だけが、こっぴどりと絞られたようで、男性室には入ってはいけないことになった

しばらくして、直子に会うと、「孝典君ひどいよ～」と言っていた

私だけが、怒られた、と、文句を言っていた

俺の状態も、だいぶ安定してきてはいた

今回の病院では、特定の話仲間もいなかった

群れず、1人で過ごしていた

売店で、お菓子や、ノート、ペンを買ったり

病院内の喫茶店で、飲み物を飲むこともあった

病院の周りを散歩したりもした

しだいに、デイケアにも参加するようになった

音楽を聴くとか

卓球をするとか

歌を歌うとか

...

そんな流れで、無事、退院

三鷹に住むことになった

三鷹の家探しの際には

病院の近くと言いたかったが、それを、不動産屋の女性に言うのが、恥ずかしかった

父には、バレナイように、病院の近くを探して欲しいと言ったが、

不動産屋の女性には、見透かされていた気がする

父が、勘付いて、「病院の近くだよ」と、逆に開き直ったが

俺は、「ああ、病院の近くね！」と、演技した

まあ、どうでもいいのだが、住み家は決まった

また1Kアパートである

ここから、診察やデイケアへの、通院生活が始まった

ここから、直子との恋物語や

作業所

古本屋

などへと、繋がっていく

アントニオ猪木は言った「道は険しくとも、笑いながら歩こうぜ」

とりあえず、現時点では、最後の精神病院を出た

3回もいたとなれば壮絶な人生に見えるだろう、やはり、そうなんだ、人間関係だけは、今も尚だ、仕事も、そして恋も？

神様は、明るい人生など与えようとしなかった...

「完」